

プログラム・ノート

かんばら ひとし

「クラシック音楽初演&初録音辞典」(平林直哉著、大和書房刊)という本を見つけました。

一気に読みほしてしまうほどにエピソード満載です。たとえばベートーヴェンは、『運命』の初演演奏会の練習で合唱団の少年の悪ふざけに激怒して殴り、この横暴きわる行為に奏者全員からベートーヴェンの指揮では演奏しないとされた話、ブルックナーは生涯独身でしたが、教会の前を通りかかる女性に「お嬢さん、こっちへいらっしゃい。私がいま作曲中の交響曲についてお話ししましょう」などと声をかけ、気持悪がられていた話などが出ています。

本日の作曲家リヒャルト・シュトラウスについても、早くトランプをやりたいからと、速いテンポで指揮して曲を終わらせた話や、趣味はギャラの計算で、息子から「パパ、今日はいくら儲かったの?」と聞かれ、「お前はワシの本当の息子になったな」と喜んだという話を紹介しています。

『ティル〜』の初演は好評だったそうで、指揮はコールユーブンゲンの作曲者フランツ・ヴェルナーでした。

『ブルレスケ』は完成当初のシュトラウスの自信が、試演練習で一変してしまった作品です。「とにかくひどくむずかしいことに気がつきました」とシュトラウスが手紙に書いている通り、全面的な改定が必要で、しばらく放置され、日の目をみるのは4年後でした。

『英雄の生涯』の初演評は「いかにも大げさに響いた」とか、作曲家自身が自分を英雄に例えていることへの不満もあり決して評判は良くなかったようです。

大作曲家であっても、初演の批評が気になり、多く悩まされたのでしょう。シュトラウスは『英雄の生涯』で批評家たちを「英雄の敵」として登場させ、攻撃をしています。

批評家や評論家という職業の大きな弊害は、その目線が上からであることではないでしょうか。また、多くの人がうわべだけの評論家の真似をしたがるという事実もしばしば見受けられるようです。人はなぜ上からのものを見たがるのだろうかと考えたとき、当事者より上からのほうが自分は何もしないで済むという責任のないポジションにいるからなのではないかということに気がつきました。そして本当に難しいことは相手と同じ目線で接し、相手を下から支えることだと痛感しました。この本は、未知のものに出会ったとき、それを素直に受け入れられる広さと深さを持つことの大切さを知らされた1冊でした。

交響詩とは表題付き音楽のことで、「ピアノの魔術師」と呼ばれた作曲家リストが造り出したものです。もちろんそれ以前にも表題付き音楽はありました。たとえば、ヴィヴァルディの『四季』、ベートーヴェンの『田園』、ベルリオーズの『幻想交響曲』。ヴィヴァルディは楽譜に十四行詩を併記しました。ベートーヴェンは「描写よりも感情の表現」と言ったそうです。ベルリオーズは自分の幻想を自由奔放に音楽化しました。しかし、それらはみな古典的な形式によるもので、その表現力には制約がありました。それに対してリストは、形式を自由化することにより表題を詩的に扱い、それを交響詩と名付けました。本日お届けするリヒャルト・シュトラウスはそれをさらに発展させ、色彩的なサウンドを造り出しました。また扱う内容も、『ティ

ル〜』のように物語性のあるものから『ツァラトストラはこう語った』のように難解な哲学書にいたるものまで多彩です。

交響詩『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』

今は昔 愉快ないたずらがいた

その名はティル・オイレンシュピーゲル。

ひどいいたずらばかりする

足取りも軽やかに、さあ、いたずらだ!

ぬき足 さし足

そして暴れ馬で市場に突入

あたりかまわず壊しまくり

女子供は逃げまどう

ティルは魔法の長靴で逃走し

こっそりかくれて、大笑い。

つぎは僧侶に変装し

人の道を説く

でも 足元はいたずら者が見え隠れ。

ふと 天罰の予感が。

騎士となったティルは

美女に一目ぼれ

脈ありとプロポーズするが

そうは問屋が、肘鉄砲。

やけのやんばち、世間への復讐を誓う。

復讐のほこさはまず、学者先生へ

途方もない題を出して逃げたら

先生たちはくそ真面目に大論争。

薄ら笑いで、高みの見物。

ティルはますますいたずら三昧。

とうとう捕まり、裁判へ

ひとごとのように口笛吹けど

はしごを登らされ、絞首台へ。

呼吸は止まり

最後のもだえ

絶命…。

今は昔 愉快ないたずら者がいた

その名はティル・オイレンシュピーゲル。

ピアノとオーケストラのための『ブルレスケ』

21歳の時に書かれた単一楽章の協奏曲風な作品です。シュトラウスはこの曲に愛着が深く、死去する2年前の83歳のときにも、自作演奏会でこの曲を取り上げています。

「ブルレスケ」とはおどけたもの、こっけいなものの意味です。ティンパニのソロで始まるという独創的なアイデアは特に印象的で、曲の完成直後、シュトラウスはこのことを父親へ誇らしく報じています。また、ティンパニは冒頭だけでなく、全曲にわたり重要な役を果たしていて、ベートーヴェン第9交響曲の第2楽章を連想させます。

曲全体は躍動感ある第1主題とワルツ風のおだやかな第2主題により、ダイナミックかつ繊細なピアノリズムを持ち、ブラームスの影響も多く見られます。

交響詩『英雄の生涯』

「英雄」

冒頭のメロディが英雄のすべてを物語ります。

低い音から沸きあがる底力

跳ね上がる気力

強調される誇らしげな足取り。

すべてが英雄の強固な意志です。

「英雄の敵」

フルートの難癖

オーボエの嘲笑

理解力のないチューバ

英雄はそれらに謙虚に接し

苦悩の末、落胆の旋律が低音で響きます。

しかしそれらを跳ねのけるのが

行動力のファンファーレです。

「英雄の伴侶」

そのとき目の前に現れた

独奏ヴァイオリンによる一人の女性。

英雄はその姿に目を奪われます。

英雄からのアプローチへの軽い拒絶に

揺れる誇りと自己重要感

英雄の旋律は彼女にあわせ変化し

愛の2重唱となります。

そしてオーボエのフレーズに誘われて

2人の影は一つに重なり

クライマックスを迎えます。

寝物語にふと耳を澄ますと

遠くからあのフルートの難癖が。

「戦場での英雄」

戦闘のファンファーレが轟き響く

宿敵との戦いの時です。

窮地に立たされる彼に

手を差し伸べる天使の声は

愛する伴侶の励ましでした。

敵を征服する最後の一撃

そして伴侶と共に、勝利の歌で凱旋します。

「英雄の業績」

それは行動力の賜物

彼の業績は

いたるところに散りばめられ

有機的に結びつきます。

「英雄の引退と完成」

引退後の田園生活

牧童の笛の音が聞こえます

華やかかりし頃を回想する英雄と

その隣には愛情豊かな伴侶の姿があります。

厳かに

偉大に

ここに

英雄は完成されます。

管弦楽

市川交響楽団 (いちかわこうきょうがくだん)

今年創立60周年を迎えるアマチュアとしては全国有数の伝統を持つオーケストラ。

メンバーは現在100余名で年齢構成は20代から70代までの幅広い層にわたり、職業も会社員、教員、主婦など多彩。地元市川市での演奏会を中心に全国各地での文化行事やオーケストラ・フェスティバル等にもしばしば招かれ演奏を披露している。また、著名な音楽家との共演も数多く経験しているほか、特に地元ゆかりの音楽家との共演にも力を注ぎ、地域の音楽芸術の振興に多大な貢献をしている。

市川交響楽団は市川混声合唱団、市川交響吹奏楽団、行徳混声合唱団、市響ジュニアオーケストラの各団体とで構成する市川交響楽団協会の中核として“クラシック音楽をより多くの市民に楽しんでもらおう”をモットーに常に積極的な活動を展開している。

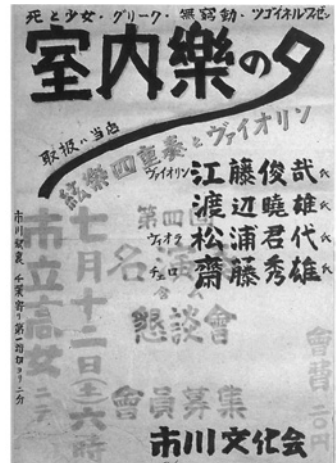
市川交響楽団協会60周年の歩み

昭和20年（1945）〈胎動〉

12.15 市川文化会発足 市川小

会長：浮谷竹次郎 理事：藤野舜正 古賀米吉 保々誠次郎 中村勝五郎、
井上平吉 高橋統間 渋谷寿光 作田敏世 音楽部長：村上正治

「出演者のお礼には入り難い「お米」3升を差し上げ喜ばれたものです。」
(50周年記念誌、村上正治氏遺稿「見えざる大きな力に支えられた56年間」より)



敗戦の翌々年、配給、闇市など食料品を始めとした物資不足や急激なインフレの中、昭和22年からは隔週のレコードコンサート（解説：大木正興氏）や「名演奏を含む懇談会」などの活動を開始。錚々たる出演者名からは当時の演奏品質の高さがうかがわれる。

昭和26年（1951）〈誕生〉

2.11 市川交響楽団結成 宮田小（旧市川高女）

7.20 市川交響楽団協会発足 宮田小

名誉会長：浮谷竹次郎 副会長：村上正治

理事：古賀米吉 渋谷寿光 藤野舜正 島津新治

監事：川崎千春 糸川英夫

11.25 第1回市響市混 市川文化祭「交響楽の夕」 真間小

指揮：宮沢政美、大橋博、秋山日出夫、村上正治、解説：大木正興

I 弦楽合奏 才能教育ヴァイオリン教室児童

バッハ「メヌエット」「ガボット」ゴセック「ガボット」

ヘンデル「ブーレ」シューマン「二人の郷弾兵」

II 管弦楽 「エグモント」序曲

III 交響楽 ベートーベン交響曲第5番「運命」

IV 男声合唱 H. G. メンネルコール

中村仁策「山の朝」山田耕作「この道」グノー「剣の舞」

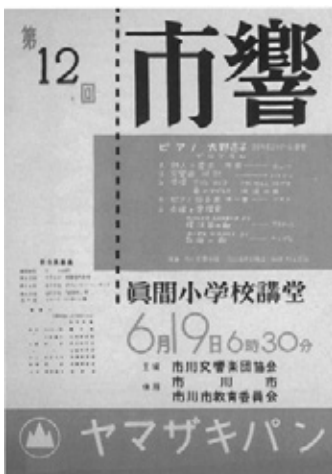
V 管弦楽 ビゼー「カルメン」第1組曲

J. シュトラウス「美しき青きドナウ」合唱付



S26年11月25日 第1回交響楽の夕 真間小学校
コントラバス江口朝彦芸大助教授(右奥学生服)も。

「当時は千葉県にコントラバスは1台もありませんでしたので、市響で買っていただいて、それをお借りして練習し、そのうち芸大へ何となく入ったというわけです。」(30周年記念誌「わが青春の市響」より)



S30年6月19日 第12回演奏会の為の練習風景
真間小学校 ピアノ、深沢亮子さん（少女時代）



S58年 文部大臣地域文化功労賞受賞記念コンサートで
深沢亮子さんとリストのピアノ協奏曲を終了した風景

昭和35年（1960）〈10周年〉

7.24 第34回市響「10周年記念演奏会」市混 市吹 和洋女子大

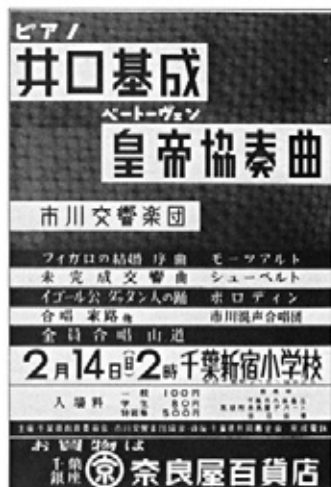
指揮：大高義人、村上正治

ベートーベン 交響曲第1番

ワルトトイフェル「エスパーナ」、J. シュトラウス 「雷鳴と稲妻」

モーツァルト「ヴァイオリン協奏曲」独奏：山岡耕彦、伴奏：中沢和子

独奏の山岡耕彦氏は現在東京藝術大学名誉教授、著書に「最新ヴァイオリン音階教本」などがある。



この年2月には、巨匠井口基成氏との共演も。井口氏はこの翌々年、第1回ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクールに審査員として招聘されている。



S40年6月27日 館山北条小学校演奏会の帰途富津岬にてバス脱輪あわや転落!!



S43年6月23日
第73回宮沢明子さん ピアノ協奏曲 市川市民会館



S43年12月1日 第75回 市川市民会館 故林リリ子さん

昭和46年（1971）〈20周年〉

12.5 第90回市響創立20周年記念「第九交響曲の夕べ」市川市民会館

指揮：守谷弘、早川正昭 演奏：市響、市吹、市混

バッハ「トッカータとフーガ」

ベートーベン 交響曲第9番「合唱」

ソプラノ：小川裕子、アルト：安斎恭子

テナー：布施隆治、バリトン：宮本昭太



昭和55年（1980）〈30周年〉**10.10 第142回市響30周年記念シリーズ・千葉県芸術祭参加 習志野文化ホール**

市響「市川交響楽団コンサート」指揮：金子建志

早川正昭 市響30周年記念「祝典前奏曲」

ベートーベン バイオリン協奏曲 独奏：浦川宜也（旧福居）

サン・サーンス 交響曲第3番「オルガン」オルガン：深井李々



この年、サントリー地域文化賞を受賞する。

S50年頃の市川小での練習風景
指揮 金子健志氏S58年6月5日
メンデルスゾーン ヴァイオリン協奏曲
前橋汀子さん**昭和61年（1986）〈35周年〉****6.1 第183回 日中交流市響創立35周年記念コンサート 市川市文化会館**

指揮：金子建志

ベートーベン 交響曲第7番

ベートーベン ピアノ協奏曲第5番「皇帝」独奏：野島稔

霍存慧「パンパン組曲」（日中友好親善）

**平成3年（1991）〈40周年〉****6.2 第218回市響創立40周年記念「日中交流交響楽コンサート」 市川市文化会館**

指揮：金子建志

青木暢男 管弦楽曲「版画模様」

秦詠誠 声楽協奏曲「海燕」ソプラノ 本宮寛子

霍存慧 交響曲「1976年」

平成8年（1996）〈45周年〉**6.30 第254回「市響45周年日中交流交響楽の午後」 市川市文化会館**

指揮：金子建志

グリーグ/村上正治編「叙情組曲」

高松華 ヴァイオリンとオーケストラの為の幻想曲

ヴァイオリン：木佐貫美保

青木暢男 舞踏組曲「下田物語」より

霍存慧 パンパン組曲第2番

平成13年（2001）〈50周年〉**7.15 第289回市響「交響楽の午後」市響50周年記念シリーズ#3 市川市文化会館**

マーラー 交響曲第3番

指揮：金洪才 メゾソプラノ：鳴海真紀子

女声合唱：東京J. S. バッハ合唱団有志 児童合唱：菅野小学校合唱部



平成15年（2003）

4.25 初代理事長 村上正治氏 逝去

「私が文化運動を始める事になった動機は、あの第2次世界大戦終了後のご詔勅をラジオで拝聴したときでした。健全な復興は、開拓精神と教育の充実及び文化活動の振興によると自悟し、実践あるのみと決心してからです。」

（50周年記念誌、村上正治氏遺稿「見えざる大きな力に支えられた56年間」より）



市川市文化会館での村上正治理事長指揮



S63年歌劇「魔笛」（モーツァルト）公演では総監督を務めカーテンコールを受ける

平成18年（2006）〈55周年〉

7.17 第320回市響「交響楽の午後」〈市響55周年記念〉 市川市文化会館

指揮：金 洪才 ソプラノ：星川美保子 アルト：田村由貴絵

合唱：「市響・復活」合唱団 合唱指揮：山崎 滋

マーラー 交響曲第2番「復活」



平成22年（2010）〈60周年〉

2.13 第2代理事長 横田行雄氏 逝去

「以来私の人生の3分の2は市響との歩みとなったのです。振り返って、もしもその時、村上先生にお会いしなかったら自分の人生はどんなものであったか、このような充実した、音楽を愛する人生があったのか、ふと人との出会いの運命的なものを思って、感慨無量です。」

（40周年記念誌「市川交響楽団団員座談会」より）



S58年 巡回コンサートを終えて、帰宅する団員グループ。
横田行雄氏（左）



H7年8月5日 アマオケ福岡大会参加 故高円宮殿下と

7.19 第348回市響「交響楽の午後」〈市響60周年記念シリーズ#2〉 市川市文化会館

指揮：田久保裕一

リヒャルト・シュトラウス作品集

交響詩「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」

ピアノとオーケストラのための「ブルレスケ」 ピアノ：根津理恵子

交響詩「英雄の生涯」 ソロヴァイオリン：立田祥子

平成23年（2011）〈60周年記念・市響の日〉

2.19, 20 小、中、高生参加・オーケストラクリニック、合唱クリニック

市川交響楽団協会加盟団体による合同演奏

市響60周年記念祝賀会